慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	高橋誠一郎著 経済学史研究
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.11 (1920. 11) ,p.1638(136)- 1642(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201101-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

高橋誠一郎著「經濟學史研究」

大鐙閣藏版　定價拾參圓

高橋教授の「經濟學史研究」は本誌原稿〆切期日と相接して遂に公にせられたり。この學界稀に觀る大著述の全篇を先づ沈思精讀することなくして忽卒紹介の筆を執るは固より評者の意に反することと甚しきものなりと雖も、姑らく細論精評を他日に期し、既に讀み得たる數章に基つきて本書の外形の一斑を茲に記さんとするは一には不取敢本書の刊行を我讀書界に報じ、一には同學同人と共にこれに對して慶賀の意を表せんとするに外ならざるなり。

本書は主として著者が「大正三年十一月より、同九年に亘りて三田學會雜誌々上に掲載せる：：研究を纂輯せるものなり」「篇を分つこと十五「マーカンチリズム概論」に始まりて「フィジオクラートの人々と其時代」に終る迄頁を重ぬること一二〇、別に詳細なる內容目次八二頁を添へ、トーマスモーア、ロック、ホッブス、ペチー、ヒューム、スユリー公、及びケネーの典據最も正しき肖像畫、奇觀書トーマスマン著 Discourse of Trade 第一第二兩版の扉、三種の Tableaux Economiques の寫眞版合計十二葉を其間に挾み、更に卷末に人名索引を附したり。而して本書の規模の如何に大にして其記述の如何に精緻なるかは此索引に掲記せらるゝ人名凡そ七百を數ふるの一事に依て推知することを得べきなり。

今著者が「初め本卷中に加ふるの意なかりし」と云へるフィジオクラートに關する部分を除けば殘る約一千頁は十七世紀を中心として其前後に接する時代に於ける英國經濟思想の研究に充てらる。而して著者の見るところに依れば「中立的經濟組織の崩壞より Physiocrates 及び Adam Smith によりて代表せられたる自由放任の學說が大體に於て勝利を得るに至る迄の間に於ける歐洲諸國の經濟思想並に之に適應せる經濟政策を以てマーカンチリズムとなすものなれば、本書はまたマーカンチリズムの研究と稱するも可なり。而してマーカンチリズムに關して斯の如き周到緻密なる研究を公にしたるもの曾てありや。我邦に於ては明かになし、評者寡聞にして西歐學者にもまだこれあることを聞かざるなり。而して此時代に於て主として論議せられたる經濟問題に三あり、貿易平衡論、貿易平衡論と密接に相關聯せる利子高低是非論及び幣制上の困難に依て喚起されたる貨幣論これなり。而して此三問題を論じたるものゝ最も顯著なるものは Thomas Mun, Sir Thomas Culpeper, Sir Gosiah Child, Thomas Manley, Nicholas Barbon, Sir Dudley North, Sir William Petty, John Locke 而して稍々遲れ十八世紀に入りてより前世紀來の宿題を論じたるを David Hume とす。（著者の最近の論文「ヒュームの貨幣論」「利子學說史上のマッシー及びヒューム」「ヒュームの貿易平衡論」が本卷中に收錄せらるゝの遺なかりしは惜むべし）本書中「英國に於ける貿易平衡論の發達とトーマス・マン」「利子徵收に關する思想の變遷と第十七世紀の英國に於ける利子論爭」「ジョン・ロックの利子學說」「ハリファックス卿の貨幣改鑄を中心として喚起せられたる貨幣論爭」「『貨幣問答』を中心として觀たるサー・ヰリアム・ペチイの貨幣論」の諸篇の中に上述諸家の意見は詳細に記述說明せらる。而して當

時の經濟論と其背景をなしたる一般哲學との交渉を知らんと欲するものは「トーマス・ホッブスの政治哲學中に見れたる經濟學說」「ジョン。ロックの哲學と其經濟學說との交渉」及びヒュームに關する二篇に就て之を窺ふべきなり。

固より本書は特殊の意見を主張するものにあらずして、學說思想の記述に重を措くものなれば容易に所謂其論旨の大要なるものを紹介すること能はず。玆には單に本書の特長を一言するに止めんとす。特長は資料の豐富、引證の精確記述の綿密殆と比類なきの一事なり。著者の一學說を紹介せんとするや、決して特定書中より其場に必要なる特定章句のみを引用する安樂なれども危險なる方法を取ることなく、必ず先づ該書の述作せられたる前後の事情を說明し（殊に同種の問題に關する豐富なる文獻を列記し）而して後全卷の論旨を詳述して問題の學說がその著者の全主張の上に於て如何なる地位を占むるかを明にせんと力む。これ固より學者當然の用意なりと雖も、これを實際に行ふ煩勞の甚だ大なることを知るものは高橋敎授の細心努力を多とせざること能はざるなり。この細心綿密はまた著者をして例へば More の「ユートピヤ」を論ずる爲めに古代希臘に遡りて共產主義的思想の由來を明にし、又十七世紀に於ける利子論爭への introduction として希臘羅馬に於ける利子徵收に關する思想、中世以來基督敎會の同じ問題に對する態度の變遷を精述せしむ。而して驚くべきは十六、七、八世紀の經濟書を引用するに當りてその重要なるものに就ては殆ど皆原書原版に據て引證せること是なり。而して此努力は徒爾ならず、敎授は屢々價値ある新發見に依て其勞を報ゐられたり。而して其の最も著しきは Thomas Mun の著 A Discourse fo Trade の發行年月日に就て、經濟學古文書の權威 McCulloch の誤謬を正せること是なり。此一事に就ては謙讓なる著者も些か得意の色あるが如し、由て左に原文を引用す。曰く、「此著（Discouse of Trade）は初め T. M. の匿名を以て一千六百二十一年倫敦に於て刊行せられたり。McCulloch は其著 Literature of Political Economy（一千八百四十五年）に於て此書の初めて刊行せられたるは一千六百〇九年なりと稱するも（同書九十八—九頁）然も A Discourse of Trade の四十七頁には一千六百〇八年及び一千六百十二年の事實を記し、更に其二十頁及び三十八頁には一千六百二十年の事實を載するに據りて察するに McCulloch は同じく一千六百二十一年に出版せられたる此書の再版を手にし、之に "The Second impression, corrected and amended" の文字あるより推して唯だ漠然と此書の第一版を以て一千六百〇九年に出でたるものと誤り傳へたるなるべし。而して……von Heyking 亦其著 Zur Geschichte der Handelsbilanztheorie（一八八〇年）に於て同一の誤謬に陷れり（第七十二頁）恐らくは McCulloch を唯一の權威として偏に之に據り、此書の第一版を參考することなくして終りたるものならんか……」と。（二二〇—一頁、併せて同頁に挾まれたる寫眞版を看よ）。

高橋敎授は學說に對する論評を下すに甚だ愼重にして確實なる典據あるにあらざれば一語を下さゞるの趣あり。例へば敎授が從來の學者が Dudley North の貿易論利子論を以て時代に先じたる卓見なりとして「最大級の褒詞を呈せんとする」を非となし、彼れの說を以て Thomas Mun の說以上に甚だ多く歩を進むるものにあらざることを斷定するが如き（此點に於て敎授は福田博士等と North に對する評價を異にす）甚だ

傾聽すべき意見と云はざる可からず。

之を要するに本書は該博と緻密と精確とに於て殆ど比類なき產物なり。これを絕後と云ふは或は穩當ならざるべし、これを空前の著と稱するは斷じて不可なきなり。本書より或物を削ることは或は能くする人あらん、之に更に何物をか加ふることに由て其價値を高むることは斷じて不可能なりと信ず、これ本書が資料の蒐集に於て至高の水準に達せることを意味するなり。

（試みに著者が綿密を喜ぶ事の甚しき一例を擧げんか、サリヤム・ペチイの事を記すに當りて曰く、「此偉大なる經濟論者が足部の壞疽を病みて聖 James 寺院に對立せる Piccadilly の居宅に永眠せるは一千六百八十七年十二月十六日夜の事なり。彼が一千六百二十三年五月二十六日午後十一時四十二分五十六秒 Test 河畔なる Hampshire の一小都市 Rumsey に於て織染を職とせる Antony Petty の第三子として呱々の聲を揚げてより年を享くること茲に六十有四なり」と（七一九））而して高橋教授が日本人にして常に日本に在りて（一年の滯歐期間の外）この材料を蒐集し且つこれを整理し得たることを顧みるときは教授の業績の光輝は愈大なりとせざる可からず。此書は吾人に教ふるに西洋の材料を以て西洋の事を論ずるに西洋學者必しも恐るゝに足らざるの一事を以てするものなればなり。

前述の理由によりて評者は急ぎ此一文を草したり。讀者幸に紹介文の長さを以て原著の價値の尺度となすこと勿れ（十月十八日、小泉信三）

小泉信三著「經濟學說と社會思想」

東京國文堂書店發行

近世社會主義の經濟理論と正統派の經濟學とは何れの點に於て交渉あるや、換言すれば近世社會主義は正統派の學說より何を學びしやの問題を價値論地代論、賃銀論及資本概念論の諸方面より究明せんとするのが主として本著の目的とする處である。

誠に著者が「兎に角、人が人の勞働を搾取することを不當とする思想は社會主義思想その者と殆ど同じ樣に古いものであつて、同時に今日に於ても、殆ど凡べての社會主義者の現社會に對する批評の一論據となつて居」（頁一）と云はれた如く近世的資本主義によつて築かれた社會組織に對する社會主義的批判の根本的基礎は搾取の二字である、換言すれば勞働せざる階級が勞働する階級の勞力を搾取する點に存するのである、而して歷史的に搾取說を考察する時は、我等は其處に二個の類別の存するを認むるのである、即ち第一の搾取說は其の價値說と何等の關係を有せざる場合で第二の說は寧ろ之れに反して或種の價値說即ち勞働價値說と密接な關係を有せしものである、而して前者に就いて著者の興味を惹起さざりし理由は「此勞働搾取の說は特に理論的訓練を經た頭腦を俟て始めて生る可きものでない、それは貧富の懸隔ある社會に生れ、貧者勞して富者逸する事實を見てこの兩事實と因果關係に結付けて考へるものの甚だ容易く到着し得る結論であらう、それ故これ丈けのところでは此說は左迄特別に經濟學研究者の興味を惹くべきものでない」（頁二）の點に存するのである、次ぎに第二種の學說は之れを主張するものゝ態度によつて相對的勞働價値論者と絕對的勞働價値論者とに區別し得ると思ふ、Ricardo は曩さに價値變動の原因は投下勞働量の變動以外に之れを覓めること出來ぬと主張したに不拘、其後彼の價値說は修正を加えられて「私の貨物の相對價値を動かす原因が二つある